

水面を利用した木密地域の更新の提案

Proposal for Renewal of Dense Wooden Housing Areas Using Water Surface

佐藤信治¹, ○小林陽太²,
Shinji Sato¹, Yota Kobayashi²

After the war, urban plans were formulated for the reconstruction of urban areas, but many of these plans were not realized, and residential land development proceeded, resulting in the spread of dense residential areas. However, in the Great Hanshin Earthquake of 1995, a large fire broke out in a dense wooden area, causing extensive damage, and the danger of dense wooden areas began to be recognized. In the urban area of the Kanto region, where an earthquake is expected to hit directly beneath the Tokyo metropolitan area, dense wooden areas are widely distributed and would be devastated in the event of an earthquake, so it is necessary to proceed with countermeasures as soon as possible.

The project site is located in Koyasu-hama, Kanagawa-ku, Kanagawa City, Kanagawa Prefecture. The site is located in an area with a fishing port called Koyasu Fishing Port. This fishing port is physically close to the residential area and also close to the water surface. It can be said that this site has the potential to be a space that is easily familiar as a water-friendly space. However, it is also an area with many problems, such as the densely wooded hinterland, the weak relationship between the back population and the fishing port and the water surface, the obstruction of the landscape by reclamation and highways, and the loss of local characteristics due to redevelopment. Therefore, we propose to plan the town and the water surface of Koyasu in an integrated manner, aiming at regional planning and revitalization of the region, starting from the elimination of tree densification.

1.はじめに

戦後、都市部の市街地では復興の際都市計画が策定されたが、それらの多くは実現せずに宅地開発が進み、住宅地が密集して広がっていった。しかし、その後1995年に発生した阪神大震災において、木造密集地で大規模火災が発生し、甚大な被害が生じたことから木造密集地域の危険性が認識されはじめるようになった。首都直下型地震が予想される関東圏都市部では、木造密集地域が広く分布し、震災が発生すると壊滅的な被害になることから、対策を早急に進める必要がある。

木密地域は様々な街に存在するが、本校で取り上げるのは、神奈川県神奈川市神奈川区子安浜である。本敷地は子安漁港という漁港を有した地域である。本漁港は住宅街との距離が近く、水面との距離も近い。親水空間として馴染みやすい場所である。

しかし、後背の木密地域、背後人口と漁港や水面の関係が希薄である点、埋立てや高速道路による景観の阻害、再開発による地域性の消失など多くの問題を抱えている。そこで、子安が有する水面と後背地を一体的に計画することで、木密の解消を起点とした地域計画・地域活性化を提案するものである。

2.計画背景

2.1 木造住宅密集地における課題

木密地域は、建物の倒壊や同時多発的な火災により大規模な市街地火災が発生するおそれをおそれ有しており、多くの市民の生命と安全が脅かされるばかりか、緊急活動や物流などの都市機能に大きな支障を

与えることが予想されている。

首都直下地震の切迫性や東日本大震災の発生を踏まえると、市民の生命と都市機能を守るため、都市の最大の弱点である木密地域の改善を一段と加速しなければならない。そのためには、従来からの取組に加え、特に改善を必要としている地区については、従来よりも踏み込んだ整備促進策を重点的・集中的に講じることが必要である。

2.2 漁港と後背地の関係性

背後人口5000人以上の「都市型漁港」が日本には点在している。都市部に位置する漁港は、その人口の多さから漁業の発展に寄与することが可能であると考えられる。しかし、子安漁港を含むそれらの漁港は後背地との関係が薄く、人々の生活と漁港は離れている。本論では町と漁港を一体的に計画し、漁業による利益を増加させることで地域の発展を図る。

3.計画敷地



Figure 1. Planned area

1:日大理工・教員・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, CST, Nihon University.

2:日大理工・院(前)・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, CST, Nihon University.

3.1 子安浜・子安漁港

子安浜の地縁組織はわずか東西約700mの間に5つの町内会,2つの町(学区),3つの浜,2つの地区など幾重もの複雑な境界線が重なり,複雑なコミュニティを築いている.特に,小学校の学区と重なる東西の地区の境界は地区内コミュニティに大きく影響しており,明治36年に子安浜に子安浜漁業組合が設立するも,東西で別の共同販売所をもつなど実質上分別しており,昭和16年には意見の対立から子安浜漁業協同組合と西子安浜漁業協同組合に分裂し,転業まで至った.

3.2 木密地域

街区内部は,主に建築基準法上の道路ではない通路で構成されており,建替えができない敷地が多い.道路に面した敷地においても狭小なため,建替えに伴い後退を行うと十分な建築規模が確保できなくなる,

子安浜の道路状況は,建築基準法上の道路は,北側の国道15号線(幅員35m),南側の公道(幅員5.5m),地区の境の公道(幅員1.8m~2.7m),西側の公道(幅員8m~12m),南北を貫く公道(幅員4m未満8本,幅員4~6m3本)が計11本,東西を結ぶ私道(幅員4m未満)が4本,行止り状の私道(幅員2m)3本の計9本である.その他は,非道路もしくは通路となっている.消防自動車など緊急車両の侵入も容易ではない.また,子安浜内には地図上ではおよそ40%近く未接道宅地が集積しており,個別の建て替えが困難である.

子安浜の木密地帯の近隣地域では協同建て替えによる地域のマンション化などが行われているものの,子安浜では未だに木密地域として取り残されており,開発が進んでいないのが現状である.そこで,近隣地域同様マンション化を強引に進めるのではなく,本敷地の地域性や漁業集落ならではの景観を重んじながら再開発していくことで,漁港が本来持っている経済性や親水空間としての価値を活かしながら木密の解消が可能であると考えられる.

3.3 現在の子安浜における水面利用

現在,子安漁港の水面は漁船・遊覧船の係留を始め,漁業を目的としたセルフビルドにおける水上納屋,栈橋,廃船を空間利用するなどスラム的かつ無秩序に様々な豊かな空間が生成されている.これら現状の水面利用を発展させていくことで木密解消や本敷地での漁業の再興を計画する.

4 基本計画

4.1 木密解消のタネ地としての水面利用

木密地区は耐震面,防火面において問題が多いことから,解消すべき問題として近年取り上げられている.対策として木造密集市街地に再開発整備地区を設けている地域は多い.それにも関わらず整備が進まないのは,過密な都市部において移住先が不明瞭である

ことが理由の一つとしてあげられる.そこで,近隣の水面を移住先として住居空間を生成することで,木密におけるコミュニティを維持しながら建て替えを進めていくことを可能とする.

4.2 既存躯体を利用した開発計画

本敷地には,かつて漁具をしまう漁倉として用いられていたコンクリートの躯体が水際に並んでいる.水際方向への動線として既存躯体を活用し,水面のタネ地と併せて設計を行うことで地域のストックを用いた再開発を行う.

4.3 漁港と後背地住宅の一体的計画

木密解消のタネ地として水面に住居空間を整備した後に,後背地の木密住宅の密集地域を解体していく.その後後背地の再開発は低層の建築を主として建て替えしていくことによって,漁師町としての風情を残したままの地域の更新を行う.

水面利用や漁業施設と建て替え後の地域計画を一体的に行い,街と生業が交わる都市型漁村を計画・設計する.

5 建築計画

5.1 導入機能

漁港機能の拡充(直売場・加工場 漁港として存続可能な環境づくり),レクリエーションの場(体験施設 魚食文化の再普及 漁業参加者の増加),レストランやカフェ,それに付随するテラス等(外部からの訪問による経済性の付与),空き家等を生かしたコミュニティの場(宿泊の場 貸家 新規漁業参加者と現漁業従事者の交流の促進),オフィス等(漁業のビジネス化 適切な経済性の付与)を主として計画を行う.

5.2 全体計画

水面を種地とした建て替えを行うことによって,漁師町の面影を残したまま木密地の解消と漁港機能の拡充を行う.

6.参考文献

- [1]東京都 木密について
https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/jimusho/sanken/doro_mokumitsu.html
- [2]Architecture workshop 木密から
<https://archws.com/profile/publications/035.html>
- [3]首都圏建築不燃公社 木造密集の解消は、まだまだ終わりのない課題
<https://www.funenkosya.or.jp/tabid/238/Default.aspx>
- [4]木密地域における住宅の更新
<https://core.ac.uk/download/pdf/223200572.pdf>
- [5]都市型漁業集落における水辺の空間構造と利用形態に関する研究 http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/research/thesis/assets/nagisa_yamada_summary.pdf